



サガの宿命観

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 六鹿, 英治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006750

サガの宿命観

六 鹿 英 治

は し が き

サガはアイスランドで第一三世紀ごろに書かれたもので、甚だ写実的な作品であるにも拘らず、その中にはしばしば奇怪な超自然的事件が多い。しかしこれは現代人の目からみた批評であり当時のゲルマン人たちはこれを現実のことと観、世界をそのように解したのであろう。私はこの超自然的事件を以て宿命観に基づいたものと思うのである。それ故この小文において超自然と宿命との関係を論じてみた次第である。第一章と第二章において当時の社会と学芸を論じてサガ発生の背景を示した。

第一章 アイスランドの社会状態

古代ゲルマン人たちが政治体制としては、専政を厭うて合議制を愛したことはタキトウスの「ゲルマーニア」に明かであるが、この合議制度も南方から徐々に崩れ始めて君主制となり、最北部のノールウェーで強力な君主制度がハラルド王によって確立されたのは、八七二年のことであった。八七〇年に西方の海中に一つの無人島が発見されていたので、ノールウェーで君主制に反対する人々はこの島に八七四年

から移住し始めたが、この島は面積一〇二八四六平方キロメートル（日本の四分の一）有り、多くの人々が移住した。これがアイスランドである。この島は水河や火山多く森林もない荒涼たる風景を呈しているので、自然の影響を受けてかサガ中の人物は沈痛の趣きを帯びている。

当時の政治体制は王のない農民の合議制であり、全島を東西南北に四分し、各区に議會（*thing*）があり、その各区を更に三分してその一分区ごとにも小議會があった。更に全島を包含する大議會（*Althing*）があった。議會にはその地方の代表者が集って、法律を制定し裁判を行ったが、当時のアイスランド人は裁判好きであったと見えて、サガには裁判事件が甚だ多く現れてくる。当時の法律は不文法であり、これを南欧のローマ法と比べると、ローマ法が個人の私有財産を守るのを主としたのに反し、ゲルマン法は社会秩序の維持と個人の名誉を守るのを主としていた。裁判は原告と被告の知的闘争であるから、闘争を好んだアイスランド人たちは裁判をサガの題材として多く用いている。また当時は軍隊警察などの国家的武力はなく各人が武器をもって身を守っていたのではあるが、彼らは全く孤立の生活をしていたのでなく、社会としての単位は血族集団であった。一族のうちで財産武芸見識人格などにすぐれた者がおのずから衆に推されて一族の長となつてこれを支配していた。サガはこのような酋長たちの伝記である。またこの血族集団相互の間には衝突が多く、その一人が殺されると仇

討ちが行われたが、それが更に仇討ちを生じて行くので、極端に走ると相互に疲れて銀を以て殺害を賠償するのであった。サガにはこの血族の仇討ちと賠償裁判が多く描かれている。

当時のアイスランド経済は牧畜と漁業であった。海国であつて魚類が多いのでこれを乾魚として外国へ輸出し、寒気のため大木育たず農作物が少ないので材木小麦などを輸入していたので、おのずから航海に長じた。加うるに各人武芸の心得があることとて、外国での貿易は變じて掠奪になり易く、ついには掠奪を目的とするヴィキング(viking)が発生した。しかし当時の考によればヴィキングは犯罪ではなく名譽ある事業であつた。これは正直な人々の副業であり、広い農場をもち多くの家畜を有して豊かな生活をしている名望ある首長たちが時々船を仕立てて海外へヴィキングに出かけたのである。彼らが外国の地を占領して小王国を建設した例も多い。それ故、小基模なれば掠奪となり、大基模なれば戦争となつた。サガにはヴィキングに出て富と名を得た人々の話が記されている。

また宗教について論ずれば、サガの神々はエツダの神々とは性質を異にしている。エツダの神々は宮廷詩人の手になる文芸作品中の人物であり、洗練されて俗気を離れ理想化され、神の国アースガルドに住んでいて人間界とは没交渉である。これに反してサガの神々は人間から捧物を受けて利益を与え、甚だ俗気が多くて現世的であり、捧物と御利益との関係は商取引の如く、或いは請負仕事をする職人の如き感を与える。これは何も神々を軽んじた批評ではない、俗人に親まれ日常生活に溶けこんだ生きた神々なのである。サガのグルーム物語に現れた例によれば、ソールケルとグルームが土地の所有を争い、ソールケルがフレイ神の社に牡牛を一頭つれてきて祈るのに「フレイよ。汝は永らく我が守り神であつて、多くの犠牲を我より受けその報いを豊かに授け給うた。このたびもグルームをあの土地から追い払い給え。」

すると牡牛がはえて地に倒れたので、フレイ神が捧げ物を受納したことを知つた。しばらく後にグルームは或る夜のこと夢を見たが、その夢の中で「フレイ神の社の前にグルームの死んだ親類たちが沢山集つている。その人々はグルームがその土地から追い払われたいようにと祈願している。しかしフレイ神は先日ソールケルが捧げた牡牛のことを思うて、グルームの親類たちの祈願をきゝ入れようとしない。」この夢を見てしばらく後にグルームはその土地を立ち去ることになった。さてこのグルーム物語に現われるフレイ神はエツダに現れるような高雅な姿ではなく甚だ庶民的であり、先約者ソールケルから貰つた牡牛のことを思うてソールケルに勝利を与えるところは義理堅くて当時の商人の信用取引を想わしめる。当時のアイスランドには文字無き故に証文はない。商取引も口約束により、信用が各人の財産であつたので、フレイ神が祈願者との契約を実行せねばならぬと考へたのは、当時の庶民の日常生活を反映していると云えるであらう。

第二章 アイスランドの学芸

サガの書かれた時代即ち一三世紀頃は北欧のルネッサンスとも云うべき時代であつた。即ちキリスト教が入つてアイスランドの国教と定められたのは一〇〇〇年のことであり、その後しばらくは学問はキリスト教の僧院で聖書を読むのみであつた。しかしやがて僧たちはラテン語、ギリシア語の力を以てラテン、ギリシアの俗書をも読んで広く学問一般に通ずるようになった。そこで一三世紀になると彼らは自分の民族の文化を自分の国語を以て書き現わすようになった。それらには曆法、法律書、文典などがあり、その科学的な研究方法は当時のヨーロッパ学界では稀れなものであつた。文芸の書にはエツダ、サガがあり、共にゲルマン人の伝説神話を記したもので古代文化の復活であ

った。

さてサガという名称のもとに一括されている一群の書を、題材によって分類すれば伝説、歴史、伝記の三種に分かれる。すべて散文である。

(1) 伝説

これはアイスランド移住以前のゲルマン民族の伝説を記したもので、シンドレクス・サガ、ヴォルスンガ・サガ等がこれに属している。

(2) 歴史

これはアイスランドの歴史で、その中でも「アイスランド史」と「移住史」がすぐれている。「アイスランド史」はアリス(一〇六七年生)の著書で移住の始まった八七〇年代から一二世紀までの二〇〇年余りの歴史を記したもので、主として憲法制定とキリスト教会の発達とを記し、当時の歐洲には稀れな科学的に厳正な学術書である。「移住史」はアイスランド移住が始まってから最初の六〇年間に移住してきた家族たちの事蹟を記したものである。無人の島も六〇年間に私有地に分割され終り、華やかでロマンティックな移住時代も終わったが、その時の家系は旧家として尊ばれた。この書には当時の日常生活風俗習慣が詳しく記され、文化史上重要な参考文献である。

この他にスノーリ(一七八—二二四)の *Heimskringla* があり、これはノールウエー王史である。

(3) 伝記

アイスランドの傑物たちの伝記で、サガの大部分はこの伝記物であり、その数は甚だ多い。その中ですぐれたものは、長篇ではグレティヤ・サガ、ニヤール・サガ、エーギル・サガなどであり、短篇ではラクサダル・サガ、グルム・サガなど多数のものがある。これらの伝記は歴史的事実を題材にしているが、多少の空想的事件も混じている。文体は簡潔雄健な写真風で、主人公は富農、内容は闘争と仇討と

裁判を主としている。これらの物語は文書となる以前に口頭伝承の語り物として世に拡がっていたものが、一三世紀になって書物となったものと考えられる。作者の名は不明であるが、恐らく富農たちであったろうかと推定される。

第三章 サガ思想と宿命観

サガには色々な思想が現れているが、それらを私は分類して、呪術、ゲルマン宗教、キリスト教、宿命観としたが、その中で最も重要なのは宿命観であろう。以下それらの諸思想について述べてみよう。

第一節 呪術

呪術もまた色々あり、ルーン文字、主柱、土地神、呪棒などがあり、その他にも現代から見ても超自然的現象と思われるのに屍怪、熊人などがある。

(1) ルーン文字

ルーン文字学の研究にしばしば引用されて有名なのは、エーギルサガ第六七章と第七六章に記されているもので、農夫の息子が恋のルーンを魚骨に刻んで恋人の寝床の下においたところ、そのうちの十個の文字を刻み誤ったために、その娘が病にかゝったのを、エーギルがその魚骨を焼き払い、新たにルーンを刻んで病を治した話がある。また同書の第四四章には、バルドが毒酒の牛角杯をエーギルに勧めると、エーギルは疑うて、その牛角杯に小刀でルーン文字を刻み自分の手を刺して血を出しその血をルーン文字に塗ると、ルーンの効力で角杯が割れ毒酒が流れおちたので、エーギルは怒ってバルドを刺し殺した話が記されている。これを見るとルーン文字が日常生活に使用されていた様子が明かとなる。

(2) 主 柱

これは家の中心となる柱を云うので、当時のゲルマン家は長方形でその長辺の中央に主柱があり、その柱に接して主人の席が設けられていた。この柱にその家の霊が宿っていると信ぜられ、ノールウェーからアイスランドへ移住するときに、移住者たちはノールウェーの自宅をほどこいてその材木を船に積みこんだ。これはアイスランドは寒気のため建築材になるほどに木が育たないため建築用材は外国から輸入したからである。やがて船がアイスランド海辺に近附くと主柱を海に投げ入れ、その柱が漂着したところを探し求めて自分の定住地としたのである。その例には「移住史」第一卷第三章のイングオルフの話、同書第二卷第五章のソールオルフの話などがある。

(3) 土地神と呪棒

土地神とはその土地を支配している神であり、呪棒とは馬の首を切つて棒の先端に刺したものを云う。その例はエーギルサガ第四章にエーギルが榛の棒の先に馬頭を刺したものを大地にたてた。「この地を支配するエリヒ王と王妃をこの地から追い払え」と土地神に呼びかけた。この土地神はサガ特有のものである。

(4) 屍 怪

屍怪とは人が死んでも屍が腐らず超自然的活動をするものを云うのである。これはその人がこの世に深い執着を残して死んだ場合、即ち殺された怨、財産への未練などが残るときに生ずるもので、その埋められた屍を掘りだして焼きはらえば屍怪現象は止むのである。屍怪の例にはラクサダルサガ第一章のフラップ、同書第三八章のハルピヨルン、サヴァルファダルサガ第二三章のクラウフイなどがある。

第二節 ゲルマン宗教

サガにはエツダに現れていない神々が現れる。エツダの神々は現世

を離れた文芸上の神々で人間世界の現実とは縁がないが、サガの神々は人間から捧物を貰つてその報いとして現世利益を授ける俗気のある神々である。前述のように同じフレイ神にしてもサガとエツダでは性格を異にしている。またソール神にしても「移住史」第二卷第五章にはソール神に捧げるため人間を大石にのせてその背骨を折る話があり、野蠻な荒神である。またエツダに現れない神としては、ヨムスヴィキングサガにはソルゲルド・ホルガブルドという女神が記されている。ハーコンがこの女神に戦勝を祈つて自分の子を殺して捧げると、女神が暴風雪を生じて敵軍を破つたのである。サガの神々は泥臭いが、しかしそれだけ当時の人々の眞の信仰状態を示しているものと思われる。

第三節 キリスト教

サガの人々のなかにもキリスト教信者がある。しかしその人々といえどもやはりゲルマン的要素の方をより多くもっているのである。キリスト信者の代表的なのはニヤールサガの主人公ニヤールであろうが、この賢明で平和と愛を生活の信条としている人物も亦、ゲルマン的宿命観を最も重んじている。

第四節 宿命観

宿命観はサガにおいてのみならずエツダにも現れているから古代ゲルマン人に広く行きわたつた思想と思われるが、サガではエツダにおいてよりも具体的に人間の日常生活に現れている。宿命観は直接にサガ中の人物の言葉として現れるときと、間接にそれと推定されるときとがある。

(1) 宿命観の直接表現

ニヤールサガ第一章のフルトの言葉「各人は宿命の定めたものを受けねばならぬ。」

同書第四章のソールドの言葉「宿命には抗し得ぬ。」

ヴァートンスタールサガ第一〇章のグリムの言葉「宿命に抗するは無益である。」

同書第一二章のインギムンドの言葉「自分はアイスランドへ行くつもりだが、これは自分の意志ではなく、宿命と呪術によるものだ。」

同書第一四章の諺に「宿命はのがれ得ぬ。」

スヴァルフダールサガ第四章のソールオルフの言葉「何人も自分の宿命の日を超えて生きる者はない。」

これらの言葉によってサガに宿命観の存することは明かであるが、最も徹底的なのはギスリサガ第九章のギスリの言葉「各人の云うことは宿命が彼に暗示することを語るにすぎない。起こるべきことは必ず起こるものだ。」であろうと思われる。

(2) 間接推定

宿命観の存在を間接に推定するのは、サガ人が前兆や予言を信じていたことに依る。前兆や予言は、未来が予定されていると思うから行われる現象である。タキトウスの「ゲルマーニア」には、ゲルマン人が未来を占うために、鳥の飛び方、神馬のいななき、占木などを用いた旨が記されているが、サガには未来を知る方法として、夢、予言力などが記されている。

(a) 夢

ニヤールサガ第六二章、第六三章。グンナルが「狼群におそわれ、自分の弟が狼に殺されたが、自分はいかに狼群を殺した。」という夢を見た。目ざめた後に敵におそわれ、弟は敵に殺されたが、自分は敵を殺した。

ラクサダールサガ第七四章。ソールケルが「自分のひげが伸びてブレイド・フィヨルド全面にひろがった」という夢を見た。これを自分の勢力がブレイド・フィヨルド沿岸にひろがるものと解したが、彼の

妻グードルンは彼がフィヨルドにひげを入れることだと解した。やがてソールケルはフィヨルドを航海中に暴風のため溺死した。

ヴァブンフィヨルディンガサガ第一三章。ヘルギのみた夢は「川岸にいて一匹の白い牡牛に牛群が攻めかかり、赤斑の牡牛がこの白い牡牛をつき殺した。」ヘルギはこれを解して、白牛は自分で赤牛はゲイテイルであると思った。はたしてその後ヘルギはゲイテイルに殺された。

さてこのような夢の知らせはいずれの国いづれの時代にもあるが、サガの特色はその多量さにあって、ほとんどすべての事件に夢の知らせが伴うている。

(b) フィルギヤ

フィルギヤ(Fylgja)とよばれるものがある。これは靈的存在で各人の守り神とも云うべき女性である。ときとしてこれが獣の姿をとって人間の目に見えることもあり、人間の夢の中に現れることもある。これもまた未来を予告することがある。

ニヤールサガ第四一章。ニヤールとソールドが戸外に立っていた。ソールドは、「目前の芝地に血だらけの山羊が倒れている。」と云ったがニヤールには何も見えない。ニヤールはこれを解して、その山羊はソールドのフィルギヤで、ソールドはまもなく死ぬ、と云った。その後はたしてソールドは殺された。

ラクサダールサガ第六七章。ソールギルスが会議(thing)へ行く途中で長身の女に行きちがった。そのとき女は「スノリの奸計に用心せよ」と唱うて行きすぎたが、彼は会議の席で殺された。この女がフィルギヤである。

グルームサガ第九章。グルームの夢に、山のような大女が海を渡って彼の家へ入ってきた。彼はこれを解して、ノールウェーにいる祖父のフィルギヤであるとした。やがてノールウェーからアイスランドへ来た船のしらせによれば、祖父の死が事実であった。

グルームサガ第二章。エイナルの夢に、大きな牡牛が室内に入つて主人の座席にすわつて死んだ。彼はこれを大事變の前兆とし、牡牛は誰かのフィルギヤであろうと云つた。はたしてまもなく彼の兄で有名な首長グードムンドが死んだ。

グルームサガ第二章。エイヨルフの夢に「自分が山を騎行していると一群の牛がつきかゝつてきた。そのとき霧がかゝつて牛群が見えなくなつた。」この夢をきいた彼の養父がこれを解して、牛群はエイヨルフの敵ソールヴァルド等のフィルギヤであり、途中で霧に包まれたからこの事件の将来は自分にはわからぬ、と云つた。

(c) 予知力

サガ人たちの考によれば、人間には未来を予知する力即ち予知力とも云うべきものが備わっている。この能力はしかしながら各人によつて差のあることは他の能力と同じである。その予知力の例をあげると、
エーギルサガ第六章。クヴェルドウルフはノールウエー王ハラルドから仕官をすゝめられたが、不吉を予感してこれをことわり、次に自分の息子が仕官をのぞんだのに、これもついに一家を破滅させるのを予知して仕官を禁じたが、それにもかゝらず息子は仕官したためついに一家が破滅した。

ニヤールサガ第一〇章。フルートは自分の姪の結婚通知を聞いて禍の生ずるのを予言した。

ニヤールサガ第三章。ニヤールはグンナルがハルゲルドと結婚する意志を述べたのをきいて「あの女から生ずるものは禍のみだ」と予言した。

ニヤールサガ第五八章。ニヤールは「グンナルが闘馬に勝つてその結果多くの人が死ぬ」と予言した。

ニヤールサガ第二章。ニヤールは「わが息子たちの一人がこの事件で死ぬ。」と予言し、はたして息子が殺された。ニヤールはその屍を見て「殺害者はリティンク兄弟だ」と言い当てた。

ラクサダールサガ第三章。グストは「オラーフの子供等のうちでクヤルタンが最もすぐれた者となり、ついにポリに殺される。」と予言した。

ラクサダールサガ第三章。オラーフは「自分の一家とラウゲン家とは仲よくやつて行けそうでない。」と予感する。

第四章 宿命観の本質

さてこのようにサガには予感や予言が甚だ多く、前述の夢を加えると殆どすべての事件が予定されており、そして予定されたとおりの終末となるのであるから、私はサガの根本思想は宿命観と認めてもよからうと思うのである。しかしまた一面において神への祈願、呪術などの自由意志も認められているが、これは宿命によって許された小範圍内のことである。サガの宿命観は自然科学的因果律による世界の予定でもなく、汎神論的な世界の予定的調和でもない。世界の宿命を定めているものは、人間の認識を超えたもので、これに善とか知とか調和とか、名を付けて限定することは不可能である。元来、予定的調和という思想は現実のきびしさに耐えられない弱さの産みだした希望であるが、これに反してサガの人々はこの世のきびしさを正視してしかも逃避せずこれと戦いこれに耐えて行こうとした剛健な人々であった。